

「第5回 サンプルダムモニタリング部会意見概要」

① モニタリング調査結果

- ・貯水池底層の嫌気化については、試験湛水直後からは改善されているものの、今年度の冬季の鉛直混合（底層嫌気化改善）は11月の出水による混合が寄与している可能性もあるため、出水などが無かった場合は、ここまで混合していなかったかもしれない。よって、引き続き十分に注視した上で、今後も改善が見込めないような場合は、水質保全対策の必要性についても検討すること。
- ・水鳥の確認数は貯水位の変動に大きく影響する場合がある。特に浅瀬を利用することが多いので、今後評価をする際は、調査日の貯水位と浅瀬の有無などを含めて分析するとよい。
- ・特定外来生物のアライグマに関しては、必要に応じて関係機関との情報共有を図りつつデータの蓄積に努めていただきたい。
- ・試験湛水時の水没範囲や水位変動域の裸地などにおいて、外来種の侵入状況を整理していただきたい。

② モニタリング総合評価（案）

- ・H29調査においてカワシンジュガイが確認されていなかったことが気になる。再度過去の調査結果を確認した上で、総合評価の重要種一覧などを適切に記載すること。
- ・今後の水国調査計画を検討する際は、造成池も調査地点の候補とし、環境創出箇所として位置づけて今後も継続的に調査を実施することが望ましい。
- ・フォローアップ段階（水国調査）では、猛禽類の詳細な調査は難しいので、各種の繁殖状況などを簡易的かつ継続的に確認できるよう工夫していただきたい。
- ・水鳥の確認数は貯水位の変動に大きく影響する場合がある。特に浅瀬を利用することが多いので、今後評価をする際は、調査日の貯水位と浅瀬の有無などを含めて分析するとよい。
- ・動植物の移植の効果を評価する際は、移植先となった箇所に既に移植対象種が存在していたかも勘案して分析・評価していただきたい（既に存在していた場合は環境許容をオーバーするだけに過ぎないため）。
- ・湛水前後の2回だけの調査で事業による影響の有無を明言し過ぎないほうがよい。モニタリングとしての最終的な評価の表現については、次年度に慎重に検討した上で、水国調査へと移行していくことが望ましい。
- ・モニタリング期間において確認されていない種（特にチャマダラセセリ・エゾヒメアマナ）については、次年度の調査での確認に努めていただくとともに、確認できなかった場合の評価は慎重に検討していただきたい。
- ・植生の冠水（試験湛水時の水没）による耐水性について、樹種ごとの違いを分析・整理していただきたい。
- ・外来種対策（オオハンゴンソウ）については、対策後の状況や今後の見通しを分析・評価した上で、今後の対応方針について次年度検討していきたい。
- ・重要種の移植後の状況を評価するにあたっては、単純に移植した個体の生育状況からだけでなく、「地域において当該種の個体群（遺伝子）が引き継がれているか」の観点で検討するべきである。
- ・景観や利用に関するアンケートについては、「満足」といった回答が大半ではあるが、「不満足」の意見の中にこそ今後の管理の参考になることが含まれていることが多いので、そちらにも留意して分析すること。
- ・次年度にモニタリングの総合評価をする際は、既往の環境影響検討で予測評価されていた内容を確認・検証する方向で検討していただきたい。

③ 今後の調査計画（案）

- ・チャマダラセセリなどの昆虫は、食草の状況も勘案して確認に努めていただきたい。
- ・水位変動域の植生には引き続き注視し、特に裸地部への外来植物の侵入について十分に監視すること。
- ・下流河川環境については、河床の粗粒化や河道の樹林化に留意して継続的に調査をしていただきたい。今後の下流物理環境変化を予見するために下流河川周辺の地質や河道内の礫厚についても確認しておくこと。

⑤ その他の意見

- ・外来生物の対策について、事業実施区域周辺まで含めた広域的な対応は難しいが、ダム事業区域内においては可能な範囲で対応を検討していただきたい。